

# 吉久の町家×芸文

## —学生シェアハウス計画の始動—

萩野 紀一郎  
KICHIRO HAGINO

### 1. はじめに

富山大学芸術文化学部（以下、芸文と表記）は現在、「地域とともに生きる」というテーマをもとに様々な地域との連携活動を展開している。「建築再生」の研究・教育・設計を行っている私にとって、高岡、富山、北陸の建築・まちなみ・暮らしは、実に豊かで奥深く、様々な刺激に満ちている。

実際に私自身は、14年前にアメリカから能登半島に引越し、里山に暮らしているが、先人の伝統的な暮らしの知恵にふれる機会が多く、日々学ぶことばかりである。また、それが昂じて、伝統知と科学的との出会う場づくりの活動にも没頭している。ただし現実には、高岡の芸文との往復を繰り返し、雑事に追われている日々ではあるが。

自分のことはさておき、建築や地域について学ぶ学生こそ、その地域の中に住み、この地域らしい環境を、頭

だけでなく暮らしを通じて肌で感じてほしいと願っている。高岡に通いはじめて2年半、高岡の歴史的な地区のひとつである吉久において、ようやくそのような計画が動き始めたので、この計画が無事に遂行され、地域にとっても学生にとってもいい成果となることを信じて、これまでの経緯を紹介したいと思う。

### 2. 吉久の町屋とまちなみ

高岡市吉久地区は、小矢部川と庄川の河口近くに位置し、江戸時代には砺波・射水地域の年貢米が小矢部川と庄川の水運と馬によって吉久に集められ、伏木港から北前船で日本各地へ送られた。1665年には加賀藩直営の御蔵が建てられ、米の集散地として発展した。明治以降も有力な米穀売買倉庫業が何社も展開され、米商の街として栄えた。

吉久の街を貫通する街道は、高岡から射水市の放生津

に街が広がっていった。

吉久の町屋の多くは平入りで、「さまのこ」と呼ばれる

につながる街道で、放生津往来と呼ばれ、江戸あるいは明治の時代から残る町家が今なお建ち並び、往時をしのばせるまちなみを形成している。

明治後期から大正、昭和にかけては、伏木に工場が相次いで建設され、その労働者たちの家が吉久にも多く建てられ、放生津往来だけでなく、伏木よりの北西側

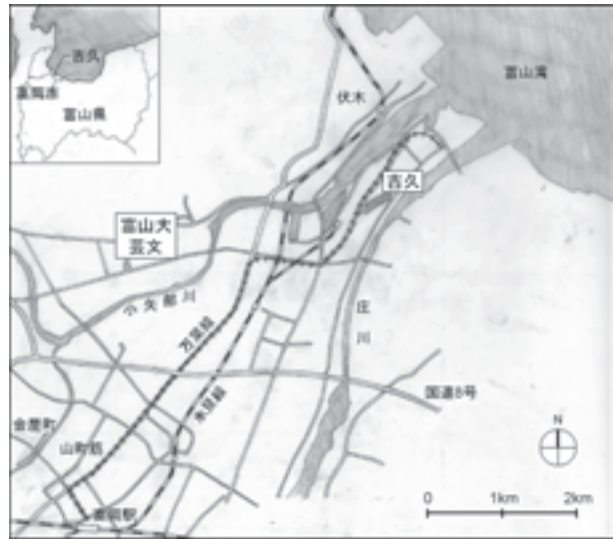


図1：吉久の地図  
国土地理院の地図、および山口太郎（2010）「富山県高岡市における歴史的町並み保全の取り組み」をもとに作成



図2：1805年（文化2年）の吉久周辺地図  
射水市新湊博物館 高樹文庫所蔵より  
（左図にあわせて横向きに掲載）



図3：吉久の町家の建築年代区分図  
高岡市教育委員会（1995）「高岡市吉久地区伝統的建造物群調査報告書」より



写真1：吉久のまちなみ  
さまのこ（千本格子）が残る伝統的な町家が並ぶ、一方で、建て替えられて前面にガレージが建てられたり、空地も増えてきている



写真2：吉久のさまのこ（千本格子）  
他の地域に比べて部材が細く繊細である

が狭く、奥行きが深く、光を取り入れるために中庭が設けられ、奥には土蔵を持つ家も多い。家の背面は背戸と呼ばれ、排水などの用水やサービスト路となっている。

このように歴史的なまちなみが残る吉久は、文化遺産としてかなり前から注目され、1993年には伝統的建造物群調査が実施されている。

一方、高度経済成長が終焉を迎えた1990年代バブル崩壊以降、日本じゅうどこにでも見られるように、少子高齢化や生活スタイルの変化、および車社会が進み、吉久においても何棟もの町家が建て替えられ、新建材で仕上げられた母屋が通りからセットバックして建てられ、前面には駐車場がつくられた。また、空き家や空地も増え、「さまのこ」が並ぶまちなみが分断されてきている。

そのような状況下、2011年には、地域の有志たちにより、吉久の歴史的景観の継承と再生をとおして暮ら

千本格子が前面を覆っている。吉久の「さまのこ」は、周囲の歴史的な街並みの町屋に比べて、格子が細く繊細であり、下屋や袖壁とともに、連続的なまちなみの特徴づけている。

江戸時代末から明治・大正にかけて建てられた古い町屋は大屋根の軒が低く、大屋根が厚板葺きの下屋よりも道路側に外に張り出している。一方、昭和以降に建てられた町家は、大屋根が高く二階建てとなり、下屋が瓦葺きで大屋根よりも道路側に張り出している。

また、吉久の町家の間取りは、他地域の町屋同様、間口



図4：「さまのこアートinよっさ2016」のパフレット  
毎年秋祭りに合わせて開催

しやすいま  
ちづくり  
を目指し、  
「吉久まち  
づくり推進  
協議会」が  
結成され

た。さらに、2013年には、空き家の有効利用やまちなみの保全活動を行う「NPOみらいプロジェクト」も発足され、2017年には、文化庁の重要伝統的建築群保存地域の指定へ、約8割の住民の同意が得られている。

まさに、歴史的なまちなみと、少子高齢化・空き家や空地の増加、この両者のせめぎ合いが今日の吉久で繰り広げられている。吉久の未来は、この両者の着地点を見出し、歴史的なまちなみを保存しながら、新たな生活スタイルにあつた環境をいかに確保していくにかかっているといえる。

### 3. 吉久と芸文との関わり

富山大学芸術文化学部（以下「芸文」と表記）は吉久から近く、僅か三キロメートルほどしか離れていない。また、

吉久は万葉線が通り、高岡駅や高岡市街へ公共交通機関が確保されている。

芸文の丸谷芳正名誉教授は、芸文が高岡短期大学であった1990年代から教鞭をとり、木工や家具を中心に教育や研究を行っていたが、伝統的な建物や街並みの残る高岡で暮らしていく間に、家具やインテリアの延長として歴史的な建築やまちなみへの関心を深めていった。特に吉久は、丸谷名誉教授の家具工房の近くに位置し、いくつかのインテリア改修プロジェクトなどを行ったことから、丸谷名誉教授は吉久の人々との親交を深め、徐々に吉久の町家やまちなみの虜となり、ごく自然に街まちなみの保存再生に中心人物として関わるようになっていった。

2008年には、私財を投じて当時空き家になっていた町家（旧津野家）を購入し、ヘリテージマネージャーの育成プログラムとして実測演習の場として活用しながら、時間をかけて調査や保存再生計画を練り、2013年には有形登録文化財の指定を受け、保存改修工事を実施し、ようやく2016年、芸文退職後にその町家に暮らしはじめている。丸谷家（旧津野家）は住まい兼ギャラリーとしてだけでなく、「NPO吉久みらいプロジェクト





写真3：保存改修された丸谷邸（旧津野邸）にて、まちなみや木造建築の保存再生に関するシンポジウム（2016年6月）



写真4：「空間デザインF（インテリア・建築再生）」の設計演習授業  
最初に吉久の方々から地域の歴史やまちなみや建築の特徴について現地で話を伺っている（2016年5月）

ト」の事務局でもあり、落語会やコンサートなど、地域活動の場のひとつになっている。

このように丸谷名誉教授が10年以上、吉久に関わり続けてきたことに合わせて、吉久と芸文との関係も徐々に深まっていったといえる。例えば、毎年秋祭りに合わせて開催されている、「さまのこアートinよっさ」というイベントにも、芸文生がアート作品を出展したり、さまのこの飾り付けを行ったりしてきた。また、卒業研究や卒業設計などでも、吉久を舞台にしたものも徐々に増えてきている。

#### 4. 私と吉久との出会い

私が丸谷名誉教授および吉久と出会ったのは、2007年に発生した能登半島地震後に、輪島の土蔵修復活動を行っている時であった。丸谷名誉教授が吉久で購入した津野家に土蔵があり、その修復方法を検討するため、我々が輪島で行っていた土蔵修復プロジェクトに何度も参加していただいた。それが契機となり、私も吉久



図5：「さまのこアートinよっさ2017」の地図  
町家の一部を公開し、様々なアート作品が展示される、芸文も2016年から毎年旧藤田家にて学生の設計作品を展示している

を訪れ、2010年に日本建築学会大会に合わせて丸谷家（旧津野家）で開催された保存改修へ向けたイベントに参加し、はじめて吉久を訪れた。

その後、丸谷名誉教授が芸文を退職され、縁あつて2016年に私が芸文に赴任することになった。ちょうどその頃、「NPOみらいプロジェクト」が、実際に空き家を所有者から譲渡され、家守としてその空き家を貸し出す事業を開始したので、私がその住民の第1号となり、私も吉久の町家やまちなみの保存に関わるようになった。

私が借りた町家（旧藤田家）は、放生津往来から一本北側の細い通りに面する小さな町家で、大正末期に伏木の労働者のために建てられたといわれている。外まわりはカラートタンに覆われ、「さまのこ」はなく、歴史的な痕跡はそれほど見受けられず、放生津往来に面する歴史的な町家比べると小さな町家であるが、小屋裏の木構造などを見ると築約90年の歴史がしっかりと感じられる。

#### 5. 「建築再生」の設計課題の試み

芸文の建築デザインコースの特徴は、「建築デザイン」だけでなく、「建築再生」、「インテリア」と合わせて、その3つを教育・研究の主要な柱としている点にある。

「インテリア」については、高岡短期大学以来、木工や芸、家具デザインなどに造詣の深い教員が多かった伝統にも由来している。

一方、「建築再生」は高岡という歴史的なまちなみが残る地域にとつて必然のテーマであり、今後、より充実した教育・研究が望まれる分野である。これまで土蔵や民家、あるいは里山の保存修復活動に関わってきた私が芸文に赴任したのも、「建築再生」の教育や研究の充実を期待されていることと理解している。事実、私が赴任直後から担当することになった設計課題の授業も、3年生前期の「空間デザインF（インテリア・建築再生）」という、建築再生をテーマとする設計課題であった。

設計演習の課題や敷地は授業担当者に一任されていたので、私は迷わず吉久の町家を題材にすることにした。そして、15週間の授業の前半は、町家を実測して図面化する課題に取り組み、後半はその町家を学生たちのシェアハウスにリノベーションする設計とした。

課題の対象とした町家は、これまで3年間の間、年度によって少し変えているが、私が借りている旧藤田邸に加えて、その2軒隣に並んで建つ小さな町家と、放生津往来に面する空き家となっている牧野邸など、地域の



写真5：古い町家の実測作業（2018年5月）



写真6：実測作業を終え一息つく学生たち

方々のご協力のもと、課題の題材とさせていただいた。課題に先立ち、丸谷名誉教授はじめ「NPO吉久みらいプロジェクト」の方々に来ていただき、吉久の歴史や町家についてレクチャーをしていただき、まずは地域の歴史や建築の特徴を把握した上で、課題に取り組み始めた。課題の前半で取り組んだのが、実測と図面化である。これは、土蔵修復や古民家の保存再生の経験から「建築再生」の最も基本であり、最も難しいテクニックと考えるものである。私はこれまで保存再生の実務において何度も実測してきたが、いざ図面を描き始めると、測り忘れた部分があったり、メモが読み取れなかったり、つじ

つまが合わずに、何度も現場に戻って測り直した経験がある。建築デザインの勉強をし始めて数年ほどの経験しかない学生にとっては、正確に測って、わかりやすくメモを作成し、スケールをもって図面化することだけでもかなり苦戦してしまう。しかし、学生にとって、図面や模型でアイデアを考えるだけでなく、実際の建物に触れながら実測し、実物を目の当たりにする作業は実に新鮮で、特に小屋裏などでの実測は古い木構造を見て感動する学生も多く、実測作業を満喫していた。実測と図面化を通じ、単にそのテクニックを学ぶだけでなく、その作業を通じて、既存の建物の構造やディテールをしっかり

と理解することにもつながってほしいと期待してはいるが、まずはこの授業で、その導入程度はできたと思われる。

後半のリノベーション設計として学生シェアハウスを課題に設定した理由は、学生たちにとって、自分たちが住む空間を考えるというのは、極めて身近であり、取り組みやすいと考えたからである。ただ、それだけでなく、まだまだ芸文が吉久に関わりを深めていく余地はあると感じたからである。この段階では、あくまでも空想のプロジェクトとして学生シェアハウスという課題に取り組むことにしたが、そのような課題を行うことで、芸文の学生たちが実際に吉久に住み始める契機とならないかと期待していたからである。

なお、学生シェアハウスを考えた背景として、私が20代から30代にかけて過ごしたアメリカ、フィラデルフィアのペンシルベニア大学では、殆どの学生たちが、大学の周囲の古い町家（ロウハウス）に共同で住んでいたという事実がある。それらの町家には様々なタイプがあり、また賃貸の形式も様々ではあったが、多くは築100年以上の古い組積造の3〜4階建ての町家で、表通りから少し上がったところにポーチがあり、そこから入った1階

部分には、共同のリビングスペースやキッチンがあり、階段を上った上階に、各自のスペースがいくつも配されている。各自のスペースの大きさも様々で、1室のものもあれば、何部屋もあるタイプもあった。欧米では浴室やトイレが寝室に付属している場合が多いので、水回りも各自のスペースにそれぞれ設けられていた。学生たちは、個人の空間と、共同の空間、さらには街や地域というコミュニティ、それらがうまく分けられながらも段階的につながっており、学生たちが街やコミュニティの一隅となつて、生き生きと暮

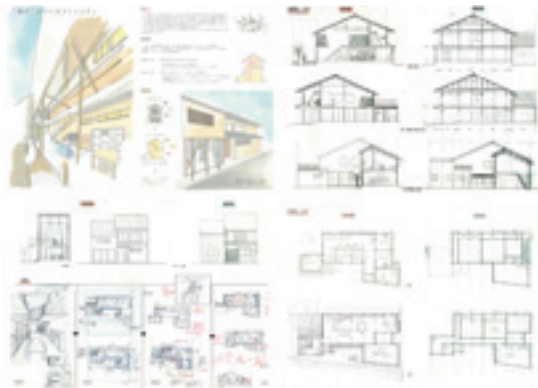


図6：「空間デザインF」の学生設計作品の一例（2018年7月、加味根みのり作成）





写真9：芸文生と「NPO 吉久みらいプロジェクト」の理事メンバーとの打合せ  
旧藤田家にて学生シェアハウス計画を進めることとなった（2018年10月）



写真7：「空間デザインF」の学生シェアハウス計画  
学生たちが各自の作品を吉久の町家にて地域の方々へプレゼンテーションし、地域の方々から様々な意見を伺った（2016年8月）

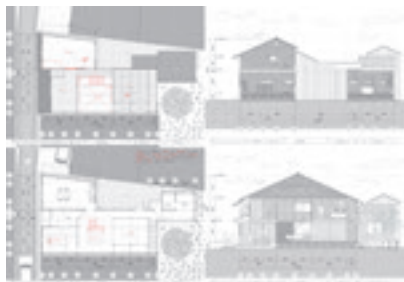


写真8：フィラデルフィア、ペンシルベニア大学近くのロウハウス（町家）  
多くの学生たちが住む（1995年ころ）

を抱いたとのことである。

早速、夏休み中に、3・4年生の有志と、関心を抱いた1年生らと会い、吉久のまちなみやいくつかの町家を案内して話を聞いてみた。彼らは、建築デザインを学ぶ予定の学生たちで、画一的で狭い賃貸アパートより、古くて多少不便でも、古い町家のような場所に共同で住むことに関心をもっているとのこと。早速、3・4年生有志と1年生でプロジェクトチームをつくり、学生シェアハウスの実現に向けて具体的な検討を開始した。

そこでまず考えたのは、私が借りている旧藤田邸を学生シェアハウスにすることである。この町家は、給排水

などの設備が整っている上、空間構成上、現状のままでは、他の部屋を通らないと隣の部屋に行けない問題があるが、階段位置を変えて僅かな改修を施すだけで、各部屋へのアクセスが可能となる。

また、私の個人的な事情だが、能越道の整備に伴い一時間半もかからずに能登の自宅と高岡が行き来できるようになった上、能登を対象とした研究や能登での設計実務が動き始めたため、必ずしも私自身は吉久に仮住まいを設ける必要もなく、それよりも学生シェアハウスの実現の方が重要であると考えたからである。

その上、この町家の所有者は、空き家の有効利用やま

## 6. 学生シェアハウス計画の始動

2016年に芸文に赴任して2年半、吉久を舞台に「建築再生」の実測と設計の演習授業を3回ほど行い、その課題の成果はオープンキャンパスはじめ、機会あるごとに学内外で展示してきた。また、芸文は1学年110名ほど、1年生から4年生まで合わせても500人以下という小規模なので、学年を超えた学生の交流が活発なためのせいか、昨年度や今年度この授業を履修した4年生や3年生から、「1年生数名が町家に住むことに関心

らしていた印象を今でも忘れることはできない。



写真7：「空間デザインF」の学生シェアハウス計画  
学生たちが各自の作品を吉久の町家にて地域の方々へプレゼンテーションし、地域の方々から様々な意見を伺った（2016年8月）



写真8：フィラデルフィア、ペンシルベニア大学近くのロウハウス（町家）  
多くの学生たちが住む（1995年ころ）

岡キャンパスで芸術文化の基礎を学ぶこととなった。

そのため、これまでは学生たちは、高岡キャンパスに通うことだけを考えて住まいを決めていたが、2018年度の新入生からは、一部の学生は1年次は五福キャンパス付近に住み、2年次から高岡キャンパス近くで住むという選択をした。調査によると、下宿生の約3割ほどらしいが、いずれにしろ、それらの学生は高岡キャンパスで基本的にすべての授業を受ける2年次には、高岡方面へ引越す場所を探さなくてはならない。そのような学生たちの一部が、先輩たちから、町家を学生シェアハウスにする設計課題の話を聞き、町家に住むことに関心

がある」という話を今年の夏休みのはじめに耳にした。

富山大学は今年度から教養教育が一本化されたため、これまで芸文生は基本的に4年間、高岡キャンパスですべての授業を履修していたが、2018年度からは、1年次のみ月曜から水曜までの3日間は富山市の五福キャンパスで一般教養を学び、木曜と金曜のみ高

ちなみの保全活動を目指している「NPOみらいプロジェクト」であり、運営方法などをNPOと一緒に検討していくことで、学生にとっても、NPOにとってもプラスになる方向性が大いにあると考えられる。

以上のことから、3・4年生のチームリーダーを中心に、まずは最小限の改修で学生シェアハウスにリノベーションするプランを考え、2018年10月には、「NPOみらいプロジェクト」の理事の方々と学生たちと打ち合わせの場を持ち、学生たちが計画について提案し、町家への思いを伝えた。その結果、NPOの方々も若い学生たちが地域に住むことは大歓迎のことで、今年度じゅうは試行準備期間とし、建物の改修だけでなく、ルールづくりや資金計画などについて、私やNPOも含めて計画を詰め、来年度からは実際に住み始めようということになった。計画が一過性ものに留まるのではなく、現在計画している学生たちが卒業した後も続けられるような持続可能なものとなるようにしなければいけないことが重要である。しかし、まずは大きな一歩を踏み出したといえよう。

## 7. 最後に —これからへの期待

今年の10月半ばに、吉久の秋祭りにあわせて実施された「さまのこアートinよっさ」のイベント時には、最初に住み始める予定の1年生3名が旧藤田家に実際に宿泊体験し、これまでに「空間デザインF」の学生作品とともに、現時点で計画中の最小限の改修による学生シェアハウスへのリノベーション計画を展示し、地域の方々と交流をスタートさせた。



写真10：学生シェアハウス・プロジェクトメンバーの芸文1年生たち  
彼ら3人が他のメンバーや地域の方々とともに住みながらシェアハウスをつくり上げていく（2018年10月）

まだまだ学生シェアハウスは計画が始動した段階だが、今回計画している旧藤田邸以外にも、以前に「空間デザインF」で題材にさせていただいた2軒隣の町家が、近いうちに空き家になるとい

した。この町家は氷見の不動産業者が所有しているが、建物の価値が高くなるような改修であれば容認しているという。この町家についてはまだ何も決まっていないので、まだ気が早いかもしれないが、是非、学生シェアハウス計画の第二弾となるポテンシャルもあるので、今後に期待したい。

是非、吉久の学生シェアハウス計画が順調に進み、学生たちが吉久に住みはじめ、学生たちにとっても多くの学びを受け、吉久にとってもいい影響を及ぼしていき、そして何よりこの活動が長く続くことを期待している。

### 【参考文献】

- ・高岡市教育委員会（1995）「高岡市吉久地区伝統的建造物群調査報告書」
- ・三沢博昭・宮澤智士（1997）「商都高岡の五つの町並み建築美再発見」高岡市
- ・山口太郎（2010）「富山県高岡市における歴史的町並み保全への取り組み―伝統的建造物群保存地区制度に着目して」『地域学研究』23、29、47頁
- ・吉久まちづくり推進協議会（2015）「吉久（よっさ）まち歩きマップ」
- ・上出麻琴（2016）「高岡市とその周辺地域の『さまのこ』の地域的特徴」富山大学芸術文化学部卒業研究

- ・松野慎也（2017）「内と外をつなぐ／しきる―高岡市吉久地区の街並み・住宅に関する研究」富山大学芸術文化学部卒業研究
- ・香山壽夫（1990）『都市を造る住居―イギリス・アメリカのタウンハウス』丸善



図9：吉久のまちなみ、立面ドローイングと屋根伏ドローイング（2018年2月、松野慎也作成）